

巻頭言

早稲田大学大学院法務研究科教授

古 谷 修 一

Law&Practice 第 16 号が発刊の運びとなりました。ご寄付をはじめとして、物心両面で発刊をご支援いただいた多くの実務家・研究者の皆様、また原稿執筆や編集作業を支えてくださった法務研究科の教職員の皆様に、心より感謝を申し上げます。

コロナ・ウイルスとの攻防はすでに2年半を越え、コロナ状況下での法務研究科の学修・生活しか経験したことのない学生も多くなってきています。“ウィズ・コロナ”の生活は、実は若い学生たちにとってはすでに日常になっているのかもしれませんが。とはいえ、人と人との対面での交流が著しく制約された日々において、チームでの作業を必要とする編集業務が大きな困難をともなったことは間違いありません。そうしたなかでも、法務研究科創設時から引き継がれてきた本誌が、今年も発刊できたことは大きな喜びです。

いかに生活習慣が変わろうとも、いかに社会環境が変わろうとも、人間が生きる社会である以上、法が果たす役割に終わりはありません。むしろ新しい状況だからこそ、新しい挑戦が法の世界、そしてそれを担う法律家に求められていると言えるでしょう。本号の発刊にいたる地道な編集作業を担った学生たちを支えたのは、「伝統を引き継ぐ」という精神だけでなく、目の前の課題に挑戦し、「新しい何かを生み出す」という気概にあったかと思えます。その意味では、コロナが変えた生活空間もまた進歩・発展の飛躍台となっています。

そのことは、本号に掲載された論稿にも当てはまります。目次をご覧いただければお分かりのように、収められた論稿は、いずれも今の課題を直視し、新しい視点からこれに挑むものばかりです。執筆する者と編集する者が、根底において同じ精神性を共有している。そのことが本誌の特徴であり、また Law&Practice を唯一無二の法律雑誌へと発展させていると思えてなりません。

学生たちが編集にその努力と情熱を傾けた本号が、日本における法律理論と実務の新しい発展に大きな影響を与える存在になればと祈念しております。今後とも、本誌に対するご支援・ご鞭撻を、どうぞよろしくお願い申し上げます。